

『監禁愛』

著：あすか

ill：Ciel

目覚めた雪久の視界に映ったのは、見慣れた寝室の天井だった。周囲を窺い、いつの間にか自宅に戻っていることに気づいた。

「ここは、私の……」

身体を起こそうとしたが、ジャラッという金属が擦れ合うような音が響き、何かが両手を拘束していることに気づいた。

「いったい……あつ！」

やっと意識が鮮明になった雪久は、両手と片足首に手錠がかけられていることを知った。

手錠はベッドのヘッドボードにあるパイプに繋がられていた。片足の手錠はその端に長い鎖が繋がられ、端はベッドの下へ続いている。

上半身をやや起こし、ベッド下をなんとか覗き込む。すると片足を繋いでいる鎖がとぐろを巻くようにしてフローリングを這っていた。鎖の行き先はベッドの脚に繋がっている。

「これは……ひっ！」

問題は鎖だけではなく、雪久が全裸であったことだった。

「やっとお目覚めですか？ センセ」

寝室に入ってきた利一を見て、雪久はすぐに声が出なかった。

「—それとも、はじめましてと言うべきかな」

言葉を重ねた利一は、口元の端をやや上げてニヤリと笑う。

いつも纏っている穏やかな雰囲気はそこにはなく、切れ味の鋭いナイフのような瞳を持った、利一の姿をした利一ではない男が立っていた。

「これはいったい……なんの冗談ですか？」

「俺達のこと知りたかったんだろう？ でもね、触らぬ神に祟りなしって言うでしょう。先生は深入りしすぎた。だから俺達は自分を守るために当然のことをしているんだ」

怒ったような、それでいて困ったような、複雑な表情で利一が言う。

「当然のこと？ 私をこんなふうに扱うことが当然だと？ 私はあなたを助けたかっただけなのに……。目を覚ましてください。きっと心の負担が限界まできていて、あなたは自分が何をしているのかすらもう分からなくなっているのです」

雪久の必死の訴えを聞き流し、利一は前髪を撫で上げ、言った。

「まずは、自己紹介からだな。俺の名はリーチ、もう一人いるのがトシ。トシは今、眠ってるから挨拶は勘弁してやってくれよ」

「二重人格だとおっしゃっているのですか？」

雪久は自分の晒されている状態を忘れて、驚きに満ちた顔で利一に訊ねた。

「それ……二重人格っていう言い方は気に入らないな。そうじゃねえよ。この利一っていう男の身体

に、二つの魂が入っていると考えてくれ」

リーチは笑顔を浮かべているにもかかわらず、魂まで凍えそうなほど冷たい瞳の存在があった。それは雪久を心底脅えさせるものでもあった。

こういう場合の対応の仕方を、雪久は心得ていなかった。

ただひたすらこれ以上彼を暴走させないようにするにはどうしたらいいのかと、そればかり考えていて、言葉も出ない。

するとリーチは右手に持っていたスマホを雪久に見えるように掲げた。

「実は先生が眠っている間に、いろんなアングルで撮らせてもらったよ。なかなかいい絵が撮れたぜ。せっかくだからデータを先生の携帯に転送してやろうか？」

「——っ！」

雪久は言葉にならないほどのショックを受けた。

「この画像だけど、先生が人には言えない性癖を持ってるように見えるんだよな。この画像をネットにばらまけばどうなると思う？ いや、先生すげえ綺麗だから、このデータ自体、いい値段で売れるかもしれないな」

「なっ……何を考えているんですか！」

雪久が叫ぶと、利一の表情は笑顔から一変、冷えたものになった。

「先生が悪いんだぜ。触れちゃだめなところに先生は踏み込んできたんだからな。こいつをばらまかれたくなければ、今後、利一に関する事は一切忘れることだ」

リーチは雪久の形のいい顎を掴み、凄みを増した瞳で睨みつけ「できるよな、先生。全部、忘れるんだ」と言葉を重ねた。

彼の見たこともない異様な光を灯した瞳が、雪久の恐怖を駆り立てる。彼の力になりたいと思っていたが、こんなことになるとは思わなかった。

「い、言いません……誰にも。約束します。すべて忘れます」

雪久は視線をリーチから逸らせ、震えた声でそう言った。

昔からそうしてきたように、かかわらなければよかったのだ。目と口を閉じ、耳をも塞いで生きてきた。ただ、雪久は利一を患者だと思ったから放置できなかった。

それがこんなことになるなんて——。

「えっ……」

いつの間にかリーチは雪久の間近にいた。雪久に視線を固定したまま、何か思案しているようだ。しばらくするとリーチの指が伸ばされて雪久の首に触れた。それはまるで壊れ物を扱うかのような慎重さがあった。

「な……何を……」

雪久は冷やりとしたリーチの指先を感じ、身を竦ませた。

「先生、俺は自分を止められない。先生が悪いんだ。こんな淫らな身体をしてる先生が……」

吐息とともにそう言うと、リーチは雪久にじわりと覆いかぶさってきた。

「や、やめてください！ 私は男です！ こんなことをしなくても私は秘密を守ります。いえ、あなたがおっしゃるようにすべて忘れ……」

悲鳴に近い声を発する雪久の唇をリーチは唇で塞ぐ。雪久は歯をくいしばって、リーチの舌の侵入を拒んだ。だが、そんなささやかな抵抗も、リーチの情欲という炎に、油を注ぐ手助けにしかならなかったようだった。

「……ん……ふっ……」

一旦、唇を離れたリーチは、左手で顎を掴んで力を加えた。

顎を反らされて自然とうすく開いた雪久の口腔に、利一はすかさず指を歯に引っかける。雪久は口を閉じることができなくなって呻いていると、リーチは再度口づけてきた。

「う……うう……っ！」

リーチは雪久の舌を吸い上げ、絡まる唾液を味わっているようだった。その触れる舌の感触に、雪久の不快感は一気に背を駆け上がり、吐き気をもよおす。

「う、くううっ……」

雪久はリーチを押しつけようとしたが、繋がれた手首だけが上がってはベッドに沈む。そんな動作を繰り返していた。おかげで雪久の手首は手錠に擦れて血が滲んでいた。それでも雪久は、抵抗を続けた。

「素直に従ったほうがいいんじゃないか？ 俺もあんまり抵抗されると、画像をこっそり病院のサーバにアップしてしまうかもしれないぜ。いいのかよ、先生」

リーチは雪久に残酷な宣告をした。

雪久は、この場から解放してもらえるような言葉を必死に探したが、結局見つけられなかった。恐怖が思考を停止させてしまっているのだ。

こうなると雪久が取る行動は一つだった。

昔そうしていたように、ただ静かに目を閉じた。

少しの間、我慢すればいい。少しの間――。

雪久は何度も何度もそう自分に言い聞かせた。顔はシーツに埋まるくらい横へ押しつけ、嵐が通り過ぎるのを待つことにした。

けれど、リーチの唇が首元から胸の尖りに移動すると、ざわりと全身の肌が粟立ち、決心が揺らいだ。

直に触れる指先の感触。その指の形すら想像がつく動きに、ようやくうすれたはずの過去の記憶が鮮明に脳裏に浮かび上がったのだ。

祖父の記憶は雪久にとって耐えがたいものだった。それが再び雪久を苦しめようとしていた。

「や、やめて……ください……」

唇が震えて、言葉をはっきり発音できないくらい雪久は怯えた。

「先生、全身に鳥肌が立ってるよ。嫌だなあ、俺そんな酷くしたりはしないぜ」

「お願いですから……やめてください」

リーチの指の動きに、雪久の不快感はさらに募った。

裸体を隠すこともできず、恥部を隠すことすら許されない。彼の前に、すべてを露わにされている現状が、耐えがたい羞恥となって、雪久を苦しめる。

だが、リーチはそんな雪久の気持ちなど一切意に介さず、露わになっている胸元を舌で愛撫してき

た。

「や……め……」

尖りの先端をチロチロと舐め上げる。リーチは雪久の胸の隅々まで舌を使って丹念に愛撫してくるのだ。

逃れようと身体を振っても、手を振り上げようとしても、両手首が手錠に繋がれているため、リーチの行動の一切を押しとどめられない。

「ひっ！」

うすい胸板の肌に軽く歯を立てられて雪久の身体は跳ねた。

虫酸が走るリーチの行為が、最初は嫌で堪らなかった。なのに熱いものが身体の奥から這ってくることに雪久は気づいてしまった。

「……っ」

上半身から隙間なく舌で愛撫され、しばらくするとリーチの頭が下半身に移動を始めた。その瞬間、雪久の決心が崩れた。

「い……いやっ！」

雪久は逃げられない代わりに声を上げ、リーチがこれから行う行為をやめさせようとした。けれど声での抵抗などないものと同じ。リーチは雪久の雄を口に含んだ。

「ひいっ！」

雪久は下半身の敏感な部分に、生温かい感触を受けて、ビクッと身体を震わせた。

「いやっ！ 隠岐さん、やめてっ！」

「リーチと呼んでよ、先生、でないと……」

唇を離れたリーチは、雪久の雄の先端に爪を立てた。

「……っ！」

「リーチって、先生の甘い声で言って」

ねだるようにリーチはそう囁いてきた。けれど、どうして無理やり犯そうとしている相手に甘い声で囁けるというのだろうか。

引き絞るような声を上げ、雪久は拒否をした。

するとリーチは、少し硬さを増した雪久の雄を横向きに銜え、上下にゆっくり、そして徐々にスピードを上げながら、擦りだした。同時に響く、ピチャピチャと耳を塞ぎたくなるような音。彼はわざと音をたてて雪久の雄を弄んでいるのだ。

「—あっ……あ」

雪久は腰からくる痺れに理性を掻き回されて、何がなんだか分からなくなってきた。

声を出すまいと歯を食いしばるのだが、その隙間から徐々に喘ぎが漏れ出す。

快楽は肉体を支配していたはずの理性を砕き、本能を優位に立たせるのだ。そんな中でも、抵抗しようとするわずかな理性が、心の中で悲鳴を上げる。

「あっ……ああっ！」

口を覆いたいと切に願う手は、遥か彼方に見え霞んでいる。その戒めから逃れる努力すら、いつの間にか放棄している自分に気がつき、雪久は愕然となった。

リーチは雪久の雄を擦り、含み、吸いつき、舌で先端を軽くなぞる。

徐々に体積を増す雄の先端からは蜜が滲みだし、リーチの唇と指をしっとり濡らしていった。その刺激に耐えきれず零れるものすら惜しいのか、リーチはまるで蜜に群がる蟻のように、丹念に舐め取っていた。

「あっ……や……。や……」

背筋を駆け上がってくる快感に、理性を侵されていく。

雪久は、リーチによって抱えられている自らの両脚に、力を入れることもできず、されるがままのポーズを取らされていた。

「本当は気持ちイイクせに、心にもないこと言うなよ」

リーチが雪久の雄を口いっぱい含み、その先端に向かって思いっきり擦り上げた瞬間、気力は「ああっ」という声とともに潰えた。

下半身に生温かいものが溢れ、雪久は痺れるような脱力感と、はしたない己に絶望した。

「う……うう……」

雪久は瞳を涙で濡らした。それに気づいたリーチが身体を起こし、涙すら流れ落ちるのが惜しいのか、器用に舌で拭い取っていく。

「先生、気持ちよかったろ。でも、もっと気持ちよくしてやるからさ」

リーチは雪久の長い睫に残る涙の玉を見つめながら、右手で蕾を探ってきた。その指は雪久の堅く窄まった部分に捻り込まれようとしていた。

「こ、今度は……何を……」

脅えた瞳で雪久はリーチを見つめる。

「先生くらいの器量なら、初めてなわけないか……」

少し残念そうな口調でリーチが言った。が、次の瞬間、雪久は低い呻きを上げ、リーチの顔に満面の笑みが浮かんだ。

「い……痛い！ やめてください！」

身体を反らせ、雪久の瞳に新たな涙が盛り上がる。

「嘘みたいだ……一本すらなかなか入らない。初めてなんだ、先生」

女だろうが男だろうが、雪久はセックスを経験したことがない。誰かに身体を触れられる。雪久にとってそれは一番おぞましく、ぞっとする行為だからだ。

「お願い……します。や、めてください……」

どうにかしてリーチの行動を止めたかった。だが欲望に魅入られた男に、雪久の弱々しい懇願など聞こえていないようだった。

「誰にも言いません……他のことなら……なんでも言うことを……聞きます。だから……」

雪久は子供のように涙を零し言葉を詰まらせて訴えた。だが、必死の言葉もリーチには届かなかった。

「隠岐さん！」

絶叫に近い声で叫ぶと、ようやくリーチは雪久に視線を向けた。不思議なことにあれほど鋭い光を灯していた瞳は、今は穏やかになっていた。

「泣かないで……先生」

驚くほど優しい口調でリーチはそう言い、雪久に唇を重ねてきた。口づけている間も、彼の右手は雪久の蕾の周りをゆっくりと揉みほぐしていた。

リーチを制止する言葉を言い尽くした雪久は、残っている力を振り絞って抵抗しようとした。が、身体はすでに痺れ、自分の支配下から離脱していた。

「怖くない……大丈夫」

リーチは傍らのクッションを掴み、雪久の背中に敷いた。すると雪久の下半身はクッションで斜めに浮き上がる。両脚は開いた形となり、うすい茂みに覆われた場所が、リーチの目前に露わになった。

「こ、こんな格好をさせないで……」

過去の暗い体験ですら、ここまでのことはされなかった。

あまりの姿に屈辱と羞恥が入り交じる。全力で拒否したいのに、今の雪久には涙を落とすことしかできなかった。

「どうして？ とても綺麗だぜ。今までこんなところを隠していたなんて、知らなかったよ先生」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>